

## 「島」から生まれる普遍的なテーマ

大城貞俊

今回の応募作品は一〇〇編を超えた。嬉しいことだ。最終選考会に届いた作品は八編。「島」というテーマでこれほどまでに広がりや深みのある作品を作れることに驚いた。同時に島を見つめることでいかに生きるかという普遍的なテーマに到達していることにも感心した。慎重な審議を経て、第一席に「六月の手拭い」（宮里尚安）、第二席に二作品「うむいदै（思い出）」（下地カナ）と「追懐の赤い日」（雲海倫）を選んだ。

第一席の「六月の手拭い」は宮古島からボリビアへ移民した男を巡る二人の女性の物語だ。移民から五十年後の宮古島が舞台で、宮古島に残した許嫁のミツ子を訪ねてボリビアから男の妻サヨがやって来る。この二人の女性の交流が中心の作品だが小説的な仕掛けもあって心温まる作品に仕上がっている。作品の美質の一つは土地の風土、文化、慣習などもよく取り込んでおり島の臭い土地の臭いのする作品に仕上げたことだ。二つ目は少ない登場人物で人間の優しさ、信頼する心、生きることの素晴らしさを描いたこと、三つ目は感動的なクライマックスを描いたことである。空港でミツ子が、許嫁は自分であったことを告げると、サヨが突進してミツ子を抱きしめる。別れの際に「ニノヨイサッサ」とクイチャーを踊る場面は圧巻である。

第二席の「うむいदै（思い出）」も宮古島が舞台の作品だ。母親のいない宮国少年は防空壕前の穴（「たこつぼ」）に落ちてしまう。たこつぼから這い出てみると、戦争末期の宮古島だった。作者の言葉を借りれば「タイムトラベルファンタジー」ということになるが、島の自然や風土を背景に友情と家族の愛情を描いた温かい作品だ。

もう一つの第二席「追懐の赤い日」は、東京の美大で学ぶ「わたし（アイナ）」が主人公の作品だ。アイナは東京に生まれ沖縄で育った。曾祖母が亡くなったことを知り、彼女の人生に触れ、何を美術の主題にするかを考える。「追懐」ではなく「追懐」という言葉を選んだ作者の言語感覚や、苦しい体験を話す語りの場面では読点を多くする工夫などもある。さらに沖縄戦の描き方もユニークで、戦争で見た赤い血の記憶と庭で咲く仏桑花の赤い色を絶望と癒やしの色に象徴させた。曾祖母の体験した沖縄戦が謎解きのように徐々

に明らかになっていくのも構成の工夫だろう。

他の最終候補作品の中では、私には特に「石の呼吸―島を織る」が印象深かったが受賞に至らなかった。応募者諸氏に敬意を表したい。